

「11011」～「11014」と明日とのあいだ

藤井 貞和

富山妙子（画家）は、3・11（2011・3・11）東日本大震災、福島第一原発による放射能災）からあと、〈日本社会が敬虔な祈りの姿勢にはいった〉と感じ取り、津波遭害、放射能災に向き合って、海の祈り、原発への怒りを描きつづけた。その、日本社会の祈りの姿勢が、二年目、三年目にはいり、どこへどう行ってしまうのか、私は富山から何ごとかを聴きたく思い、イベント「現代への黙示」へ出かけていった（2014・9・20）。いま、九十四歳。シカゴ大学の反原子力のサイト「atomic age」には、富山の描く福島第一原発のむきだし廃屋の絵像が表紙に置かれる。

3・11の直後、そしてその2011という一年を、日本社会はどうしようとしたろうか。深層というべき社会の底で何を受け止めたか。赤坂憲雄（民俗学）は「自然エネルギー特区」を構想する（福島、はじまりの場所へ）『朝日新聞』（2011・6・14）。かれは復興構想委員として、いきなり「精神史のなかの東北について語りたい」と語り始めて（鎮魂と再

生のために）、復興構想会議四・三〇）、おそらく並みいる委員たちの度肝を抜いた。無効な発言だと言うことでなく、この発言じたいに生きられる権利がある。「自然エネルギー特区」構想は（ミロク・プロジェクト）でもある。東北という絆が試され、世界へ向けて創るという提案は、表層で無効だとしても、〈東北学〉を踏まえた深層からの発言ということにたぶんなる。

「3・11以後を考えるうたげの会」は、その赤坂や、口承文芸学会の会長を以前に務めた川田順造らによって、四月には発足し、八回のイベントで東北に向き合ってきた。「琵琶物語と琵琶歌のうたげ」（後藤幸浩・片山旭星）、「語り芝居・泉鏡花作『肩かくしの霊』（鳥山昌克）、「東北を歌う——津軽三味線の世界」（二代目高橋竹山）、「詩の生まれる場所」（入澤康夫）、「納涼語のタベ——『死神』（柳家小満ん）、「災間を生きる（うた）と（ことば）」（赤坂憲雄×佐々木幹郎）、「撃つ、歩く、廻す——韓国伝統芸能のうたげ」（ミン・ヨンチ）、「浄瑠璃を（歌う）、文楽を語る——『曾根崎心中』の世界」（豊竹睦大夫＋豊

澤龍爾)。

何回目かのパンフレットには「3・11の記憶を忘れようとしている日本に抗して」とある。「うたげ」というような名づけからだと、悠長な宴会と見られる。無論、悠長でよく(気長に)、うたげ(宴会)は本来の神迎えという意図かと思われる。どんな神々を現代は迎えるのだろうか。むずかしい局面が三年め、四年めにのしかかる。

『東北を聴く——民謡の原点を訪ねて』(佐々木幹郎、岩波新書、二〇一四・二)はみぎのイベントの出演者、高橋竹山(二代目)とともに歩む、というか、東日本大震災の直後の被災地の村々の行脚を記録する。竹山と言えば、かの竹山(初代(一九一〇〜一九八))しか知らなかった。私ばかりではあるまい。その初代の演奏を通してのあの津軽三味線、という固定観がゆすぶられる。最初に佐々木による「鎮魂歌」が載っている。二代目竹山と佐々木とは、九月末から、大船渡、釜石、陸前高田の町々を回り、演奏と民謡、詩の朗読というライブをかさねた。

津軽三味線はもともと、「唄のつき物」でしかなかった。じょんから節、よされ節など、いくつかの数少ない民謡のための伴奏楽器でしかなく、たんに三味線と呼ばれるのに過ぎなかった。それを現代音楽として開拓したのが初代で、一九七三年には渋谷のジャン・ジャンをいっぱいにして、世に迎えられる。一点だけ光は見えたらしい、しかし、文字などは見えなかったという。三陸海岸から北海道まで一人で門付け芸を続けた、「ボサマ」

である。その竹山のもとで、高橋竹与として内弟子生活をはじめた彼女は、一九七九年に自立し、初代の亡くなる前年に二代目を襲名する。

初代は昭和八年(一九三三)、三陸海岸(野田村玉川地区)にいて、泊まっていた宿屋で揺れを感じた瞬間、大津波が来ると思い、盲人の芸人、四人とともに裏山の竹藪に逃げた。芸人たちが、ときに大規模な人数で、ときに少人数で、唄会興業をしながら、村や地区をわたっていたことがわかる。七十八年前のことながら、かれらが避難するとき、手助けした女性がいたというので、その川崎ヨシ(一九〇一〜二〇〇三、百二歳)口述の聞き書きが小谷地鉄也の筆記/翻刻でのごされていた。

川崎「旅館に目のめーないかだあ四人もいさんした。……たしか、くずまぎ生まれのかだど、ぬまぐないのかだど、そーして、たがはし、三味線の先生も、まだ「ぼーさま」ずー名のどぎでおであんした。」と(くずまぎは葛巻、ぬまぐないは沼宮内)。旅館の人にたのまれて、公園(高台)のほうは草原を通ってゆくの、転んだら起こせないと思ったので、どんな大きな津波が来ても心配ない高台の地区へと、かれらを押しに行った。二人ずつ、縦に並べて、背中を押し上げた。「気を付けてください。足元に気を付けて、四人一塊になって下さい。私の力はあまりありませんので」と言ったら、どなたか、「ありがたい人もいるものだ。助けて下さい」という声があった。「早くしないと死んでしまう」と思いながら押し上げたことを思い出すと、

いまでも「ぞつ」とする、と。

特養ホームで九十四歳のときに録音された、川崎からの聞き書きテープを佐々木たちは聴くことができた。四人を助けるために、川崎は咄嗟の判断で、急坂を登らせてもう一つの高台へ、かれらの背中を押しながら、自分も津波で死ぬのではないかと恐れたという。以前の津波の記憶が(村に)のこされていて、川崎を適切な行動へ導いたというように推測できる。

それから五十年後に、初代はお礼をいうために川崎を訪ねている。しかし、その時の記録も、記憶も、周囲のひとつにはのこされていない。二代目竹山は、ヨシのご遺族からの話を聞き終ると、ふいに立ち上がり、「お礼に民謡を唄わせてもらいます」と、牛方節、そして津軽山唄とを続けて唄った。佐々木は、「門付け芸とはこういうことではないか」と、二代目竹山の朗々とした声を聴きながら、何かが腑に落ちるように溶けてゆくのおぼえた。

二代目竹山と佐々木とは、三・一一のあと、(佐々木に拠れば)「ライブの旅という名の門付け芸に出たのだ」。初代は独奏曲をつくり、現代音楽としての〈津軽三味線〉を創生したが、ある意味で、かれらは、初代と逆に三味線を「唄のつき物」という本来にもどし、民謡(といまでは唄の)原点で、何かをとらえようとした。新しい「口説き節」(語り物)を作りたい、という思いはそれだろう。

冒頭に「鎮魂歌」を寄せているが、それに集約される、現

代詩と、口承文芸、芸能、語り物との接点ということに思いが走る。これが佐々木にとって避けられないテーマだったような気がする。自由詩の最先端を行くように見せながら、民俗社会や古典、また諸地域の言語にこだわり、ずいぶんもたつきもする。東北のボサマとの「出会い」をかれらは果たした。以前に(一九八〇年代初頭)、九州で盲僧を追いかけた時、いつかは東北でのボサマに会いたいと思った。

山口弥一郎の一冊『津浪と村』(恒春閣書房)は、『東北の村々』(同)とともに、昭和十八年(一九四三)の刊行で、それが石井正己／川島秀一により復刊されて(二〇一一・五)、昭和八年の大災害と、三・一一のそれがまっすぐに向き合うこととなった。この復刊は口承文芸関係者の手になる、いち早い貢献であり、これなくしてはいたずらな議論が論客たちによっていかになされようと、半端な物言いではしかならう。兩人は阪神淡路大地震のあった夏(一九九五)に、この書を携えて三陸を踏破したのだという。

重茂には、明治二十九年(一八九六)と、昭和八年と、再度全滅した集落がある。上閉伊郡鶴住居村にも、再度全滅した集落があるけれども、昭和八年の死者は二、三名であった。それに対して重茂の一集落では、救われたひとがわずかに二、三名であった。この生命の災害の差は何に原因するか。高党性集落を決意しながら、なぜ挫折し、失敗するのか。一方では、団結して山をあがり、救われた村がある。そうでなかった村との決定

的な差異とは何なのか。全滅した村のなかには、生きのこった古老もなく、再度の津浪を警戒するすべを知らなかった、という不幸が付き纏う。

古い伝説を持つ村もある。役小角を名のる行者が、あるとき、村にあらわれ、かずかずの奇瑞によって、村人の信頼を得たのちに、高台への移動を託宣して去ったという。その教えを守ることを千二百年という「伝説」は、山口の本からの孫引きに拠れば、「史を接するに、役の小角、或は行者ともいふ。……此の行者が、一日、陸中の国は船越ノ浦に現はれ、里人を集めて数々の不思議を示し、後、戒めて言ふには、卿等の村は向ふの丘の上に建てよ、決して此の海浜に建て、はならない。もし、此の戒を守らなかつたら、災害立ちどころに至るであらうと。行者の奇蹟に魅せられた村人は、能くその教へを守り、爾来、千二百年間、敢へて之に背く様なことをしなかつた」(今村明恒「役小角と津浪除け」、と)。

津波震災の三陸を、地理学そして民俗学の立場から、さきに田中館秀三が、そして山口が歩いて調べ上げた。明治二十九年の震災のあと、高地性集落を敢行した村と、そうでなかった村との、昭和八年における明暗を丹念に挙げている。昭和三陸地震は昭和八年(一九三三)三月三日午前二時三十分、釜石町の東方沖約二百kmを震源として発生した地震で、マグニチュード8.1と推定される。マグニチュードは対数計算であるから、数値が1.0上がるたびに、いったい何倍のエネルギー換算にな

るのか。たぶん、11か12かで隕石の衝突や地球の消滅だろう。人類はその直前の「撤退」するぎりぎりまで闘わねばならないはずだ。

震源は日本海溝を隔てた太平洋側だったという。三陸海岸までの距離があったために、明治三陸地震に比べて、地震による直接の被害は少なかったものの、発生した大津浪が襲来して、大きな被害となった。最大遡上高は気仙郡綾里村で海拔二十八・七mを記録したと言われる。

ノーン、ノーン

地震の直前の鳴動音を山口は何度も聞き書きしている。ノーン、ノーン。津浪のことを「海嘯」と呼ぶ、まさに海の嘯きだろう。その名を冠する、被災後において施行された「海嘯罹災地建築取締規則」は、被災地での建築物の建造を原則として禁止、違反者への罰則規定まであったという。防浪堤の設置は、山口が山田町の「津浪のトーチカ」として報告する事例など、町を護ろうとする努力を見せている、「ただ心配されるのは漸次防壁外にも居住地域が進出しはせぬかである」と山口は記す。もとの被災地へ一人移り、二人が永住することによって、郷土の先輩たちの築きあげた防塞が無に帰してゆく心配を、山口は『津浪と村』のなかで繰り返す。

被害の大きさとべつに、実際には集落移動に失敗した例として挙げられているのも船越であるから(『津浪と村』『東北の村々』)、地理的条件、古老の意見、国庫補助などの、錯綜する

困難を越えることのあまりのむずかしさである。『東北の村々』によると、現地居住というかたちを取る五例は、明治二十九年の津浪のあと、無防備のままふたたび津浪被害を受けた村や、防波堤、防潮林、コンクリート塀による武装の在り方など、さまざまを見せる。

三陸沖から南へ数百キロを突つ走つた今回の地震による断裂だった。福島沖、茨城沖とあまりにも広域である。福島沖の震源は原発群に襲いかかるといふ無惨な始まりの時を刻んだ。記録ということからも、メディアという観点からも、経験のない始まりとなった。強烈な地震に耐えきれなかった送電鉄塔の倒壊によるか、原発の冷却装置の停止と、原発基地への津波の襲来と、どちらがさきかわからない。いや、東電側が隠していることを含め、わからなくさせられていることが多すぎる。

3・11被災の数日後から、ツイッター（投稿サービス、ミニブログ）を利用する一詩人（和合亮二）の詩的発信が始まった。早くから力量を蓄えてきていた（中原中也賞詩人である）和合による、被災地へ、そして全国への、詩的発信について、いくつか、きちんと分析ないし批評しておかなければならないと思う。その分析ないし批評がなされていないというより、見えなくさせられ、隠されている。和合の詩的言語による、発信内容に籠もる被災者たちへの励ましということとともに、出版関係を含むジャーナリストたちをも突き動かして、フォローワーが急速に広がるという、二十年前の阪神淡路大震災ではありえなかつ

た現象をつくり出した。しかし、問題は、県外でもそうだったが、福島県という県内で、和合の発信行動に対し、拒絶反応がつよく詩の書き手たちのなかから出てきたということがある。

むろん、励まされる人のなかに、詩の書き手がいくらもいてよい。これは難解な問題だ。そのような拒絶反応（と言っておく）は、県内の詩の書き手や教育関係者など、多少なりとも文学の周辺でつよかつたらしい。「らしい」というのは、県外から容易につかめないことである上に、県内にあっても、文面のよくなかたちでは、なかなかはつきりとのこる性格のものでない、隠微さを特徴づけられる。県外と県内とを分ける現象であるとともに、県内で評価が割れるという、だから福島県内と国内ぜんたいとの関係は後者にとり前者を縮図とする。この構図は押さえておきたいことの一つだ。

三月十一日〜十五日という被災状況をいまでも思い知るならば、原子炉のつきからつきへ起こる水素爆発（第一報は水蒸気爆発ともあった）、過酷なメルトダウン（底部が地下へ突き抜けるチャイナシンドロームではないか）、三月十五日午後から深夜にかけての信じがたい高線量（子どもたちを襲つ）という、刻一刻のなかで東日本の「死」を「見」、覚悟もした人がいたはずだ。これらがすべてにとつての原点である。いまに忘れようとしている人たちは、意図的に忘れようとしているか、原点であることを感じなかつた人たちか、だろう。

記憶や記録のたいせつさを、言つて言い過ぎることがない。

そのたいせつさを言うことは、意図的に忘れようとする、場合によって記憶や記録を歪曲する向きに対して、抵抗することでもある。詩なら詩という、直接にして即時の感情の分析を含む文学が「記憶や記録」に深くかかわることを得意とする、とも言っておこう。詩とは無論、短歌や俳句その他を含んでいる。〈直接にして即時の感情の分析を含む〉とは詩の機能の一部ではない。

六月には和合のツイッター詩が三冊の詩集というかたちで出版される。詩集ならば、詩の専門出版社から出されるのに馴れている読者たちには、それらが徳間書店、新潮社、朝日新聞出版という、(場違いな?) 大手出版社から出されるといふことに、異常さをおぼえたと知られる。三冊は、それぞれに特色を有していて、そのうちの『詩ノ黙礼』(新潮社)は、やや長編にする意図をツイッター発信のうちから持っていたもようで、構成的にも、言語の質の高さからいっても、詩史にのこるよい詩集であり、ポピュラーな出版社から例外的に出された商業性をさし引くとしても、それ自体が非難の理由にはならないはずだ。

すさまじいと言つてよい、和合への「批判」が聞こえてきたのは、私の場合、それらの三冊の詩集が刊行されたあと、しばらく経つてからである。垂れ流し、ポピュリスト、売名、和合某が……、といった和合の詩行動への「批判」は、ツイッターでの発信に対して早くあったか、推測に属することで確認できない。多くは三冊の詩集刊行のあとにおいてだったと思われる。

福島県内では、教員としての職務をほったらかして、出演やイベントを優先している、などという声が聞かれたという。そして、その年の内に、在京の詩誌の上では、「震災特需」(文学特需だったか)、「詩の被災」といった、心ない言葉が和合に向けられていった。

三年めにはやや沈静したかと思われたものの、なぜか四年めにはいつて、「総動員体制」という纏め方や、あるいは、「和合」という症例つまり「俗情との結託」の最悪のケース、といった言い方での批判が、新たに付け加わってくる。三年という周期を越えて、何かが変わるといふことのようにであり、あたかも日本社会でヘイト・スピーチがひどくなるのにあわせた現象だとも見られる。

「特需」とは隣りあう国での戦争で金儲けをする日本社会の経済的「復興」を意味する語であった(朝鮮戦争である)、この語はなかなか私に使えない。「総動員体制」も戦時態勢をいう語であるから(ナチズム系の思想家が使用した語でもある)、爆発的に「売れる」和合の本がどうして総動員体制という認識になるのか、しかし戦争状態を類推するようなこれらの論じ方には一定の理由があると、冷静に見守る必要がある。

和合は(詩を書くとはどういう詩を書くべきか)という、世間からの承認を踏み外したために、かれらを怒らせた、不快感をかきたてたのだらう。そのことは、詩を書く人たちの共同体(ふわふわと存在する)がどこかでほんやりと機能するというこ

を意味する。これが私の推測である。「あいつは許せない」という、見えない共同体からの感情が和合を攻囲することとなった。怒りや不快感は日本社会が少数者を差別し排除するありふれた感情だろう、その差別や排除により少数者を追いやってしまったら、あるいは懲らしめが終われば、または「和解」すれば、忘れたかのように落着することだろう。しかし、過酷事故のさなか、多くのフォロワーが和合のツイッターを読んで詩的表現を求めたために、現象的には少数者とさえない、多数派がそこにいるかのような脅威を既成の（共同体的な）書き手たちに与えていった。

フォロワーのなかには、出版関係者たちや、多くの（さまざまなたいプの）ジャーナリストたちがいたことも押さえる必要がある。（富山の言う）敬虔な時、何かを必死になつてさがし求めたいとき、長年にわたりジャーナリズムに携わってきた職業的勤、あるいは出版人魂とでもいうべき、各自がおのおのの根底箇所を揺さぶられ、災害後しばらくもせず書店に出版物がふれることとなり、読者たちもそのなかの良質な部分をかき分ける力のためされて、特異な出版／読書圏の連鎖的ブームが現出することとなった。その現象を別の角度から、やや白い眼で見るようにして、「かれら（出版人たち）には商機が訪れているのだ」という判断をする一定の論客が出てこようし、それを「特需」と揶揄する捉え方もありうるといふことか。あくまで「原点」に立ち返る必要がある。未曾有の災害時に、和合のよう

な表現形式が行われていることを知って、それを報道し、特集し、あるいは出版活動に結び付けることに対し、評価されこそすれ、それらを「商機」であるかのように、またはいわゆる悪質な「売名」であるかのように決めつけるならば、出版史上の汚点になりかねない。

私とて、ただちに判断ができたわけではない。長谷川權（俳人）の『震災歌集』（中央公論新社、四月）がいち早く本屋さんで平積みになったときにも、それに接しては真意を計るののいつときを要した。見きわめるぎりぎり提出された作品の質にある。和合の三冊を、買って手元に置くべきだいな詩集であると確認してカウンターに並んだ。念のために言う、かつして寄贈されて手にしたわけではない。「いま、ことばがほしい」という、飢える思いもさりながら、さきにも言ったように、ツイッターという、大きくもないメディア形式をおさらずと利用しながら、大震災をあいてに長編的構想で抗するという、『詩ノ黙礼』は詩史にのこる、と思われた。ツイッターについては、現代にごく普通に行われるソーシャルな通信手段であるから、それじたいに何ら特異点はない、という批判もある。私には三月下旬になつてようやく和合のツイッターに到達するという遅まきであつたけれども。

福島事故というこの原発暴走とは何か。口承文芸との接点に、どこまでさぐっても行き当たらない。なぜだろうか。「災害」と口承文芸」（第38回日本口承文芸学会大会シンポジウム、

二〇一四・六・七（八）では、会場から、福島原発事故による被災者に触れられないことについて発言があった。自殺者も出ている状況があると。原発事故と放射能とによる、避難を余儀なくされている人たちの現実を避けているのではないが、まだ向きあえずにいるというもどかしさを感じた、とその報告にある（杉浦邦子報、『伝え』55号）。

『震災と語り』（石井正己編、三弥井書店）にはその希少な試みである語り手や研究者の在り方を、「（語り）のライブ」原発事故と昔話」（中川ヤエ子・野村敬子、於東京芸芸大学）として見せる。これは復唱しておこう。中川と野村、そして聴き耳の会のメンバーが、栃木市および鹿沼市に、原発事故で住むところを失った老人たちを訪ねる。福島からの避難生活者はおお（その時で）十五万余であり（チェルノブイリを思い合わせよ）、生活のたつき、家族（津波遭害の被災者でもある）、家畜たち、生きるすべ、氣力を失い、隣県に身を寄せる人々がいる。放射能災は、生ある限り今後三十年以上つづき、子どもたちや生殖能力のある男女（特に女性）にはいまでも避難を呼びかける研究者のいる危険さであり、しかも崩壊した原子炉じたいの再臨界や強震によるさらなる倒壊の可能性なしとせず、まったく収束していないなか、福島県の被災地は見棄てられるマイノリティー地となりつつある。

かれらの肩に触れながら、中川は語りかけようとする。自身は涙声になってしまつて、語ることが辛い。浪江から来られた

人に、語りかけようとする、「おらあ、耳が聞こえねんだあ。だから、おらには語んねえでもいいんだあ」とか、「死ぬときになつたわあ」とか、そういう方へ、語り手の中川は「タヌギの糸車」を選ぶ。（冬のあいだは山を下りて、無人となる山の小屋で、かみさんの糸車をまわしながら、タヌギが真つ白な糸を作る。タヌギは見よう見まねでその技術を覚えたのだ。春になって人間たちが帰ってくるのを待っていた。木こりも、「うーん、おらあ、どうもあのタヌギに悪い考えを持つていたようだ、おめえが言うとおり、あいつは本当にいいやつだ、さみしがりやで、おどけ者でなあ」つて、そう思つてたんだと。「おーい、タヌギさん、これからは友だちになつてな」と、木こりとかみさんとは元氣な声で叫んでいたんだと。はい、これでおしまい。）」

中川がこれを語り出した最初、毛布を被っていた聴き手が、昔話の終わつた途端、ぱつと顔を出して、「おもせかつた（おもしろかつた）」と言つてくれた。隣の、「おらあ、耳がわるい」と言つていた方も、こつちを向いてちゃんと聞いていた。もう一人のおじいちゃんはずいいてくださる。かれら三人の新しい生活が始まるのに際し、語ること（言語活動）の必要さを考えた中川、そして野村らによるヴォランティアである。「おもせかつた。次、いつ来る？」と、閉ざした心がすこしずつ和いでゆく。語り手たちにしても、語りに長年、従事してきたことの、報われようとする一瞬だろう。

無論、「昔話を語らせてください」と行くと、お役所からは「ばあちゃん、観光に来たんじゃねえぞ」と、追ひ払われるわけで、口承芸文学がもつと社会的に認知される必要がある、と野村は結ぶ。「人間が人間と会って、心を交わしあう昔話という文芸の原形に立ち戻っていく学問であることを、もう一回、私は訴えてみたいなと思っております」と。このことは『昔話——研究と資料』41（日本昔話学会、二〇一三・三）のシンポジウム「昔話の継承と実践 可能性と課題」の「趣旨説明」（野村）にも繰り返されている。いくつもの語り手たちの会や学会が、大地震、大津波に向き合って、大きな活動の軌跡をのこした、のこしつつあることは、社会学や歴史資料学と別に、あるいは社会学その他の容易になしえないところであり、特記に値する。それだけに、原発の被災に対しては困難をきわめる活動だったと、その特異な事故の持つ性格をきちんと分析する必要がある。なによりも、政治的意図や経済界からの要請が優先して、人為的に隠されたことがあまりに多すぎる核災であり、依然として「原点」からのその告発が緊要にある。語りが、〈隠されたことの周辺〉にだけ立ちいりを許される、という二流品であつてはならないだろう。

黒板に東北地方の大きな地図を張り出しながら、以前には各駅停車で何度も下りた福島県を、（新幹線の）一時間以内で跨ぎ越えて仙台まで連れられて行くわれわれであり、いつのまにかそのことに馴れてしまった自分が、いま「マイノリティーの文

学」（講義名）を担当する資格のないことに茫然とする。

天武時代から元禄年間までの地震年表をA3の四倍に拡大してつくる。八六九年の貞観地震を海底考古学から論じるという、（伝承にふれた）論文がたしか『國文學』（学燈社）にあった。あれを次回までにさがさなくちゃ。

関東大震災翌日の大阪朝日新聞をやはり黒板いっぱい拡大して掲げる。手慣れた教師ならば、パワーポイントなどにして手際よく講義を展開できるのだろう。不器用な自分だ。拡大して仔細に読むと、壊滅的な首都圏を大阪からもどかしくアプローチする報道のさま、湘南にも小田原にも津波が押し寄せていったようすが浮かび上がる。

マイノリティーの課題を板書する。1、少数民族の文学（言語）、2、在日、3、女性、子ども、性差別、4、差別／被差別、5、沖繩、そして6、東北、7、人種差別（黒人……）、8、障害者差別、性同一性にかかわる差別、……。今年の課題としてせり出してくるだろう被災地、とくに福島県が、数年を経ずして置き忘れられ、日本社会から切り棄てられてゆくということはないのか。沖繩とともに、これがマイノリティー問題ではないのか、と。

一ヶ月遅れの五月からの授業開始のなか、この原発で起きていること、起きているところか、拡大しつつあることと、講座「マイノリティーの文学」とは、直結するのだろうか。それらは枕程度にふって、本格的な「ちゃんとした」講義をしなさい、と

いう陰の声が聞こえてきそうである。

いきなり、来週はブルガリアへ出張で休講にする。ブルガリアのお隣りがルーマニア、そのかたにチェルノブイリだ。日本社会が何を忘れたか、何を隠蔽したか。反原発と脱原発とのあいだにこぼれる問題もある。

第二回(五・二四)、印字してきた写真(昨日の)を見せながら、「福島県のお母さんたちです。文科省へ押し寄せている。二〇ミリシーベルトへ引き上げた文科省への抗議に五百人がやってきました」。

「高木仁三郎さんのプリントです(「原発事故はなぜくりかえすのか」(二〇〇〇・一二)から)。東海原発の臨界事故で、亡くなった二人が見た青い光。あれは何だったのか、チェレンコフの光だと、高木さん。なかに氏が峠三吉の詩を引用している。正確に、広島、長崎を思い出せ、ということですよ。高木さんはこの岩波新書の刊行を見ずしてなくなりました。冷静に、社会の将来を見据えています」。

「ブルガリアでは石橋克彦さんのことも述べてきました。原発震災のパワーポイント資料十一枚を見てください。これは二〇〇五年に石橋さんが政府筋へ訴えたカラーのページで、ここに印字してきました。武田邦彦さんのサイトも福島のお母さんたちへ丁寧な説明に満ちています」。

ブルガリアでは、冒頭で、

①われわれがチェルノブイリ原発事故からの教訓をほとんど受

け取っていないということをいま、強く遺憾に思う。

②一九九〇年代後半に、ある地震学者(石橋克彦)が警告していた。日本列島の海岸線を、ぐるりと花輪のように原発がかざり、そのしたを活断層が走っている、と。このままでは、原発震災(Quake-induced Nuclear Disaster)が、何十年かに一度ずつ、日本での日常的風景として、起きることだろう、と。国際的に許されることではない。いま、居住できない地域が、福島県を中心にしてひろがり、海は信じられない濃度の汚染である。

③しかし、日本政府はつい先日、富士山の南にある危険な原発(浜岡基地)のスイッチを落とすと決定した。日本から真の平和が発信できる日の来ることを希望してやまない。

と言ったことどもを訴えた。その国際会議での総題が、早くから決められていたことといえ、「不死と出来事」とはあまりにも日本の3・11と符合する。

黒板に特製のヨーロッパ地図を掲げる。「ここがブルガリア。ここがチェルノブイリ。放射能を含む煙はこう移動しました。日本でも同じことが起きたのです」。

日本近代文学研究や社会文学の領域では、新しい研究者が参予し続けて、今年(二〇一四)になっても、なお震災後文学への取り組みが、原発事故から広島そして長崎原爆文学へと、二重写しされるようになってきている。そうなると、著述活動や学会発表が、ある種の引き返し不可能な「震災後」(キーワードとなる)を刻んでゆくように思われる。小説などの創作者た

ちの息の長さを見合う、それら創作とあるところまで雁行せざるをえない研究領域であるために、その「引き返し不可能さ」は将来に実りの季節を迎えるかもしれない。□承文芸学の方向を示唆しているかもしれない。

「思想」（これもキーワード）はジャーナリズムと直結するためにか、論客たち（ほぼ全員、男たち）が、第一年め、第二年めというように、着実に震災批評とでも言うべき領域を切りひらき、一般に意見を纏められない、われわれのような右往左往という人種に、適宜、意見を与え、あるいは意見を集約してくれた。しかし、福島第一原発の廃炉のあとを観光地化しようという、悪ふざけなのか冗談なのか、そんな計画が書店に並ぶようになると、ほぼ思想的に実りを見せることなく論客たち（ほぼポストモダン世代のかれら）の季節は終わる。ジャーナリズムと直結するために、意見集約という役割がかれらによって果たされたと言え、二年め、三年めという、ジャーナリズムじたいの攻勢のくさくさには、良心的であろうと否とにかかわらず、論客たちもまたつきつきに倦むかのごとく、一人降り、二人降りしていった。圧倒的な人気を保っていた論客の雄、吉本隆明は一見、原子力産業推進派を装う発言の繰り返しに、その真意をいぶからせたままで亡くなる。

南相馬市からは市長桜井勝延がYouTubeで世界にメッセージを発していたことを、和合のツイッターとともに思い出しておこう。詩作品「神隠しされた街」の書き手、若松丈太郎はいみ

じくも「核災棄民」と言った（『福島核災棄民』コールサック社、二〇一二年）。津波で何もかもなくなってしまった街は、核災の追い打ちで避難区域となり、無人と化した（二〇一四年十二月をもって解除だという）。若松は何かの動画のなかで、一軒の押し流された土蔵を指しながら、鈴木安蔵の資料のあったところだと説明を加えていた、これは津波被害である。帰途、線量計の振り切れそうな飯館村を通って福島市内にもどると、翌朝のニュースで吉本の逝去を知る。

大曲駒村（俳人）には『東京灰燼記』（東北印刷株式会社出版部、一九二三年）があり、関東大震災からわずか一週間のちという時に纏められている（序文による）。十万の死者の彷徨する「死せる都の傍より、生ける田園の諸君へ」と序文（朱書）にあるのは、惨状を「田園」という故郷へ報知したい一心だろう。その故郷、南相馬市（駒村は小高地区の出身）が壊滅する。鈴木餘生は駒村とともに小高地区の俳句文化を担い、その遺児、安蔵が日本国憲法起草の次第など、すべて若松から教えられるなどして3・11以後のわれわれの学習（3・11憲法研究会を立ち上げる）に属する。しかし、思えば、はかないことだ。

『美味しんぼ』（作・雁屋哲、画・花咲アキラ、小学館）の110頁巻は「福島の実①②」と題して、調べ上げた力作であり、主人公たちが被災地を訪ねて鼻血に見舞われるところは、和合の場合と同じく日本社会の許容線に抵触したのだろう、「許せない」描写だという批判が出てくる。二〇一四年という時を刻む

イメージ的作品として記憶と記録とに値すると申し述べておこう。依然として最重要なのは「記憶と記録と」以外でありえず、同時に「記憶と記録と」を矮小化し、抹消しようとする隠微な力に対して抗することにある。

3・11のあと、(すこし述べたように)五月下旬になって、福島県のお母さんたちが五百人、文科省へ押し寄せたことを記憶しておこう。なぜこれの記憶が必要かというと、東京人や埼玉県人その他の心の奥(古い言葉で言えば実存のような感覚)を、彼女たちの行動は揺り起こしたと思われる。存在感のややもすれば希薄で、同質感のつよい都会人でありながら、福島の人々にどこか心の奥で連帯したい思いがくすぶって、その思いをかき回されたのではなからうか。それからまもなくして高円寺などで、そして国会前で、それから全国へと、市民たちが街頭へ出てくる、原発依存の日本社会から脱出することを訴える、金曜日デモへと発展する、という画期的な日本社会を現出した。福島県民による行動と、じっとしておられなくなった都会がわの動きとのあいだに、関係がなかったかどうか。

国会前に出てきた(いまもつづいているが)いくつかの世代を観察すると、第一に全共闘世代(いわゆるベビーブーム世代)であったことは特徴的だろう。若い日の社会変革の夢破れて、挫折感もあれば、体制内改革(や地域活性化やフェミニズム運動)に良心をときに燃やししながら、定年を迎えてなお思い止まず、かれらの古戦場である国会前に出てきた、という感じがあっ

たとは思ひあたるひとが少なくなからう。足取りはよたよたと、プラカードは重たく、思うように動かないからだであつても、自嘲と誇りとのないまざる、かれらのなかの自分像は往年の勇士だったかもしれない。沖縄で少女暴行事件が起きると十万人が抗議に参集するという報道も、かれらをどこかで突き動かしていたはずだ。(シニア決死隊と当初言われた)福島原発行動隊はかれらを主体とするのではなからうか。

3・11という、津波/地震災、そして福島放射能災が、巨大な災害として起きたばかりでなく、もう一つの災害(二次災害)というべき、風評に始まり、忘却させ、事実に関する別の言説にすり替えて、正面から被災を口にすることすら憚られる、ヘイト・スピーチ社会の到来に抗することはいま、なかなかむずかしい。

口承文芸学とのいきなり接点ということでは、苦慮することばかりであるけれども、社会学でも、あるいは民俗学でも、容易に解きほぐせない世紀の難問は、それじたいが現代における〈口承〉の在り方を深くも問うのかと思われる。大会および数次にわたる例会を通して、おもに大津波の記録および記憶の累積に関してであるけれども、精力的に取り組むことをしてきた日本口承文芸学会に対し、敬意を惜しみたくない。

(ふじい・さだかず/立正大学)